

コミュニケーションワーク活性剤としての コラージュの有効性について

鳥 丸 佐知子

複数のコミュニケーション関連の講義において、自己理解・他者理解・相互理解などを深める手段のひとつとして、この数年コラージュワークの導入を試みてきた。本稿はの中で特に効果的であったと思われたある講義を取り上げ、コラージュワークの果たした役割について検討した。自他理解のみならず、コミュニケーションワークを活性化させるものとしても、コラージュワークが有効である可能性が示唆された。

キーワード：コラージュ、自己理解、他者理解、対人関係、コミュニケーション

はじめに

コラージュ (collage) とは、フランス語で糊付け (すること) を意味する。もとはピカソをはじめとする現代美術の重要な技法のひとつで、雑誌やパンフレット・新聞・写真など既成のイメージを、ハサミで切り抜き、台紙の上で再構成し糊付けするという方法である。芸術(表現)療法の一つであるコラージュ療法は、このコラージュを、臨床場面でも活用していこうとするものである。日本において、コラージュの技法そのものは、1970年代から、主に精神科などで、集団絵画療法の一技法として、作業療法士やアートセラピストによって活用されていた。しかしその後1987年頃から、森谷 (1993, 1999) を中心に、個人心理療法にも導入されるようになった。「持ち運べる箱庭」、「ミニ箱庭」とも称されるコラージュであるが、箱庭に比べ、比較的容易に、さまざまな場面での導入が可能であるという点で大変便利である。

臨床場面においては、継続的に作品を作ることで、クライアントの不安や問題点の理解、治癒につながると考えられている。また、雑誌等からの「切り抜き」という既成のイメージをそのまま用いて自己表現作品を作ること自体に、自己治癒的な要素があるとも考えられている。

I. 研究の目的

コラージュワークが、アクティビティとしても利用されることから分かるように、この手法がさまざまな効果を持つものとして活用される場面は、臨床場面に限ったものではない。言語と異なり、二次元的奥行き表現であるコラージュは、イメージ (こころ全体、総体的、全体的な部分) として自己をとらえることが可能になり、日常生活においても、自己の内面の意識化・洞察に役立つ。また、ひとつの作品として構成して出すことができたという経験は、自ら達成感・満足感を味わう経験ともなる。何かを始めて終わった (完成

した)という心の変化は、混乱・葛藤を良い方向へと向かわす疑似体験にもなるであろう。また例えば共同作業として導入した場合、自己認識を高め、対人関係の向上だけでなく、そこでの非言語的・言語的コミュニケーションを通して、グループの集団凝集性を高める可能性も考えられる。

佐藤(2003)は、看護教育において、効果的に対人関係を学習するための体験学習の一つとして、自己表現と、非言語的コミュニケーションの中核に、コラージュを据えた。そしてそこに、俳画的箱庭・対人関係地図を加え、ジョハリの4つの窓の考えを指標におき、自己理解を深める試みを行っている。他の類似の試みの先行事例として、精神臨床看護学演習での導入(白石・則包, 2001)、短大における、人間関係体験学習としての導入(吉田, 2001)などが見られる。

筆者自身も、数年前から、まず看護教育の「人間関係論」のワークの場面で、次に通信教育「コミュニケーション入門」関連のスクーリング場面で、その他、複数の通学のコミュニケーション関連の講義の中でこのコラージュワークの導入を試みてきた。

本稿は、その中で最も効果的であったと感じられた、通信教育スクーリングのある講義を具体的な事例としてとりあげ、自己理解や他者理解のみでなく、コミュニケーションを活性化させるものとして、コラージュワークの持つ可能性について考えようとする試みである。

吉田(2001)は、コラージュ法(マガジン・コラージュ法)を人間関係プログラムに利用する際、検討すべき課題として「①マガジン・コラージュ法が自己認知・自己表現の手段となりうるか」、「②マガジン・コラージュ法を

集団で行うことにより、相互製作の過程でピア・カウンセリング的要素、あるいは人間関係調節の機能を持つか」、「③マガジン・コラージュ法が集団凝集力を高めることができるか」という3つの項目をあげている。本稿でも、これらも参考にしながら、体験学習としてのコミュニケーションワークにおけるコラージュワークの有効性について検討したい。

Ⅱ. 研究方法

<事例>

①対象

「教育学特殊講義」(コミュニケーション入門)の受講生38名(男12名、女26名)。平均年齢35.9歳(標準偏差12.6、範囲20~79歳)。

②実施方法

<講座の概要>

本講座は、教育学科専攻の学生に対して開講されている専門科目で、70分×9コマで構成されている。本事例の場合、日曜日ごとに3コマ連続での講義で、講義は週1回、3日間に渡って実施された。

本講座の受講生である通信教育の学生は、通常はテキスト履修中心で、個人で学習をしている場合が多い。そういう環境にある彼らにとって、スクーリングは、大学の教員や、ともに学ぶ仲間達と対面で接することのできる貴重な機会でもある。そういった背景も考慮し、教育学科の専門科目であり、大人数にはならない可能性が高い本講座において、筆者は数年前から従来の講義形式を取りやめ、様々な体験学習を含むワークショップ形式を取り入れるようになった。

↓ 自分から見た自分	→他者から見た自分	「明るい窓」 自分も知っており 他人も知っている自分	「盲目の窓」 自分は知らないが 他人は知っている自分
		「隠された窓」 自分は知っているが 他人は知らない自分	「暗い窓」 自分も他人も知らない 自分

「明るい窓」または「開かれた窓」
相手にはっきりと理解された心のこと。開けっぴろげの自分。
「盲目の窓」
本人の気づいていないことで他人はよく見えている心の動き。
「隠された窓」
自分ではよくわかっているが他人に対しては自分の本心を表に出さない。他人に知られていない心の動き。
「暗い窓」
本人も気づいていない、無意識、潜在意識の世界。

Fig.1 ジョハリの四つの窓

今回取り上げるコラージュワークは、通常2日目に実施しているが、まず3日間の講義内容について簡単にその流れを紹介する。

初日、通常は全員が初対面であることが多い。そこでまず、本講座が座学のみではないことを伝え、3日間、ある時間を共有する仲間として、互いの緊張を緩めることなどを目的に、ウォーミングアップから始める。具体的には、まず全員席を立ち、ラジオ体操ができるぐらいを目安にして、教室内で広がってもらう。その後、まずは一人でのリラクセーションから。田中（2003）などを参考にしたプログラム内容で、首弛緩、首回し、肩甲骨合わせ、簡単な呼吸法の紹介など。その後アイスブレイクとして、あいさつのレッスン（最初は言葉を用いずに、次は握手してひとこと言葉を交わす）、並びのレッスン、ふれあいのレッスン等の身体を使ったワークが続く。最後に「どれだけ周りの人を信じられるでしょうワーク」として紹介する「フォーリングバック」（本講座では1グループ10名前後の構成）

で身体を使ったワークはすべて終了する。

次に、ここまでのワークでペアになったことがないメンバーとペアになってもらい、3種類の会話の体験学習をする（ここでいう3種類とは、最初「うなづく」だけの応答、次が無反応（例えば still face 状態）、最後が普通の会話）。役割交代を含め、全員がこれらを経験した後、各自自分の席に戻り、今現在の感じを忘れないよう、筆者が事前に用意した「ふりかえり用紙」に、感想など簡単な記入を求める。なお3種類の会話については、「ふりかえり用紙」記入に関して、ペアを組んだ相手と話し合いをしてもよいと伝えている。

休憩をはさんで「20答法」をそれぞれ自ら体験。簡単な解説を加える。その後、細かい解釈の仕方などの説明をせずに、今現在の自分の「対人関係地図」と、「ジョハリの4つの窓」図（Fig 1. 参照）を作成してもらう。なおこれらについては、次回忘れないように持参することを伝え、その日はそのまま各自家に持ち帰ってもらう。この段階までで初日の3コマは終了である。講義の最後に、2日目は「私」をテーマとしたコラージュを作成する旨を伝え、そのために必要だと思われる雑誌、新聞紙、写真等を、次回忘れずに持参するよう伝える。

通常、初日が終了するこの段階では、クラス内の雰囲気はすでに和やかになっていることが多い。

2日目がコラージュを用いたワークである。全体の受講者数によって、多少の違いはあるが、4～6名のグループで、「私」と「他者から見た私」をテーマに、2回のコラージュ作成をおこなう。

3日目(最終日)は、交流分析・アサーションなどについて、入門段階の解説を行い、その後5～6人のグループで、具体的な体験(例えばDESC法など)をしていただく。最後に実際にこの講義を受講してどう感じたか、素朴な感想を含む試験を実施し、講義はすべて終了となる。

この講義はその内容から、結果的に、いろいろな受講生との会話の場を提供することにもなっており、最終日には、教室内はかなり和やかな雰囲気になることが多い。またこの講義に参加したことがきっかけとなり、その後の受講生どうしの交流関係が広がる場合もあるようである。

＜授業におけるコラージュ活用＞

前述のように、2日目が今回取り上げるコラージュワークの導入である。基本は佐藤(2003)に沿って実施しているが、以下簡単にその内容を紹介する。コラージュは、マガジン・コラージュ法を用い、2つの課題をおこなう。

＊課題Ⅰ：テーマ「私」

各自持参した雑誌から、私らしいもの・好きなもの・気になるもの等を切り抜き、台紙に作成する(40分程度)。ここまでは、各個人による作業である。課題完成後、グループ内で互いの作品を用いて自己紹介し合い、各人の特徴をつかむための質疑応答の時間も設ける。ここでいかに活発な意見交換ができるかが、その後の流れに大きく影響する。

上述のように、各メンバーは、グループ内の他のメンバーに、自らが作成したコラージュを用いて自己紹介をするわけだが、そこで意見交換する際、①最も気に入った切り抜きは

どれか、②私らしさが表れているのはどんなところかなどがポイントになる。この課題では、自分をいかに自己呈示するかもポイントになっており、「見せたい自分」でも「本当の自分」(主観的な思い込みの場合もあるが)のいずれで自己紹介をしてもよいと事前に伝えている。

＊課題Ⅱ：テーマ「他者から見た私」

次に雑誌類をグループのメンバーで共有し、課題Ⅰで得た情報をもとに、各メンバーにふさわしい切り抜きをし、自分以外のグループのメンバー全員に必ず1枚以上渡す(今回は平均2～5枚程度交換した)。つまり課題Ⅱでは、自ら切り抜いたものは使わず、他者からもらった切り抜きのみでコラージュを製作するのである。もらったものがどうしても受け入れられない場合は、裏に貼ってもよい。またもらった切り抜きの加工は自由である(40分程度)。

課題完成後、出来上がった2枚のコラージュを比較しながら、再度グループ間で意見交換を行う。課題Ⅱでは、①1枚目との違い、②2枚を比較して自分なりに気づいたこと、③切り抜きをもらっての感想、④グループの他のメンバーに切り抜き留意点などについて体験をふり返る。2つの課題が終了し、グループ間での意見交換も終了した後、筆者が事前に用意した「ふりかえり用紙」にそこまでの感想などを記入。その後、グループ以外の人々の作品も鑑賞する時間を設け、さらに意見交換を行う。

休憩をはさんで、「対人関係地図」と「ジョハリの4つの窓」について、簡単な解説を加える。2枚のコラージュ作品、それに初日に作成した「対人関係地図」と「ジョハリの4

つの窓」をあわせて、自らの人間関係の在り方について、個人単位で自分なりのふりかえりをし、コラージュに関するワークは、すべて終了する。

③コラージュワークに関する

ふりかえり用紙の構成

「ふりかえり用紙」は3種類の内容で構成される。まず、①このワークに参加してどう感じたか「自分」と「グループ」に関する12の質問文に対して、自分の気持ちに最も近い

ところに丸印をつける質問紙。これは5件法（5：最も高い 4：まあまあ高い 3：ふつう 2：やや低い 1：とても低い）で回答を求める。次に②同様のテーマで、「自分」と「グループ」に分けての自由記述。そして最後に、③このグループワーク全体を通して印象に残っていること、影響を受けたことなどに関する自由記述である。グループメンバー個人に対する感想などは、ここに含まれることになる。

Table. 1 ふりかえり用紙集計表

<自分について>									
質問	内容	得点					データ数	平均	標準偏差
		1	2	3	4	5			
1-1	十分楽しかったですか	0	0	3	15	19	37	4.4	0.65
1-2	メンバーの言うことを、十分聴くことができましたか	0	0	7	17	13	37	4.2	0.73
1-3	自分の言いたいことを、十分話すことができましたか	1	3	9	15	9	37	3.8	1.01
1-4	グループワークは、十分満足できましたか	1	0	6	19	11	37	4.1	0.85
1-5	メンバーの理解は、十分できましたか	1	1	16	18	1	37	3.5	0.73
1-6	自己の理解は、十分できましたか	1	0	10	21	5	37	3.8	0.79

<グループについて>									
質問	内容	得点					データ数	平均	標準偏差
		1	2	3	4	5			
2-1	グループは、十分安心できましたか	0	1	0	16	20	37	4.5	0.65
2-2	グループに親密感を、十分持つことができましたか	1	0	9	20	7	37	3.9	0.82
2-3	グループは、十分自由な雰囲気でしたか	0	0	5	13	19	37	4.4	0.72
2-4	グループに信頼感を、十分持つことができましたか	1	0	12	13	11	37	3.9	0.94
2-5	メンバーはグループに、十分参加していましたか	0	0	5	16	16	37	4.3	0.70
2-6	あなたはグループに、十分参加していましたか	0	1	8	14	14	37	4.1	0.84

3. 結果

質問紙の記入に不備のあった1名を除き、37名のデータについて分析を行った。Table 1は「自分」「グループ」別に、質問紙部分につ

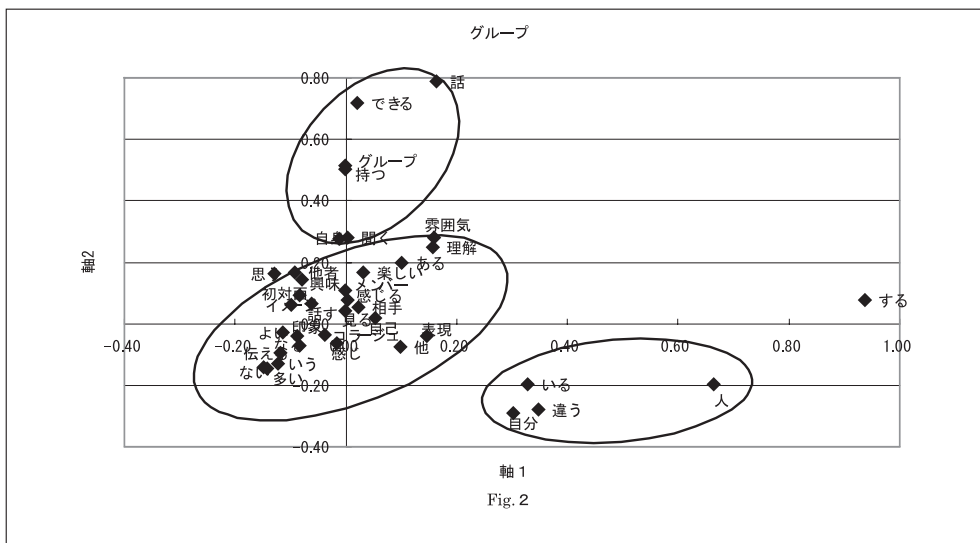
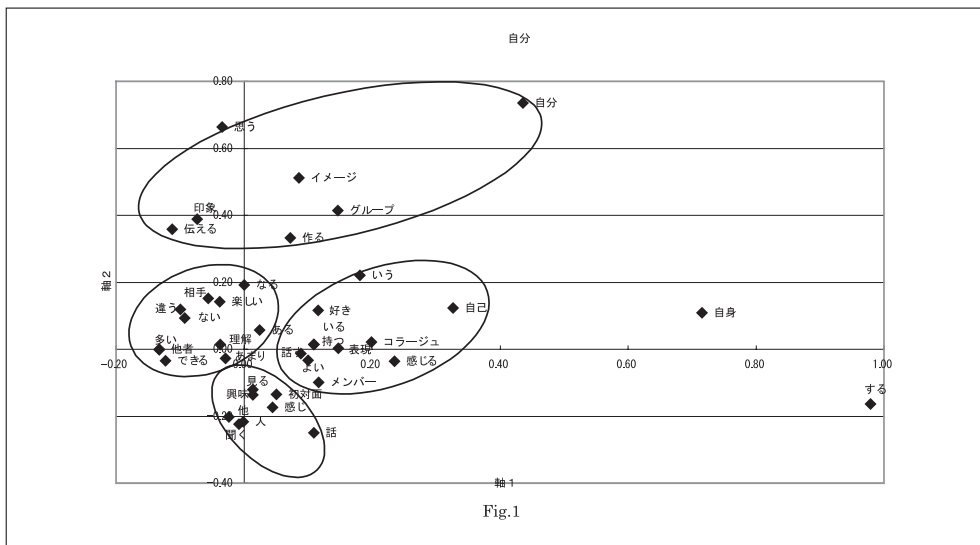
いてまとめたものである。まず「自分」について見てみると、ほぼ全員が、このコラージュワークを楽しみ、満足できたと答えている。またグループの他のメンバーの話も「自ら」よく耳を傾けようとしていた様子がうかがえる。次に「グループ」についてだが、ここで

はすべての質問に対して、平均評定値 4 点前後という高い評価になっている。これはグループ間の雰囲気が、大変和やかで、安心でき、親密感・信頼感も十分に持つことができたことをうかがわせるものである。

次に②の自由記述データの分析であるが、これについては、テキストマイニング手法を用いて分析し、その概要を把握した。具体的には、「自分」か「グループ」かによって 2 群

に分類した全記述データを、すべてパソコンに入力する。その後、フリーソフトウェア KH Coder を利用し、「ふりかえり用紙」の自由記述欄に使用されている語を抽出する。さらにそこから、多変量解析に使用するためのデータを作成する。類語の集計は EXCEL 上でを行い、その後、SPSS を用いて主成分分析を行った。

Fig. 2・3 は第 1 主成分を横軸、第 2 主成



分を縦軸に、成分負荷に従って布置図を作成したものである。

まず「自分」に関する自由記述データについて見てみたい。こちらは個人に関する記述になるので、当然のことながら個人差があり、共通の要素を見つけ出すのは難しいところがあるが、抽出された言葉の分布を見ると、集中しているのは図の左下であることが分かる。ここを（やや無理はあるが）3つの塊に分類してみた。それぞれ「自分とは違う他者・相手は、あまり理解できない時もあるし、理解できるときもあって楽しい」「初対面の他の人と話をしたり、（話を）聞いたり、（コラージュ作品を？）見るのは興味深い感じ」「コラージュを用いて自己を表現し、他のメンバーという話し、（自分の意見を？）言うのを楽しいと感じた」と解釈してみた。そして、その上に、もう一つ別の塊があると考え、この部分は「自分が（コラージュで）伝えよう（る）とした印象からグループのメンバーはイメージを作るように思う」と解釈できそうである。

次に「グループ」に関する記述について。ここでは大きく3つの塊があることが分かる。ここも抽出された言葉が集中しているのは、図の左下の部分になる。この部分からは「楽しい」をキーワードに、「コラージュワークがきっかけで、自己と他者に対する興味を感じ（る）」たこと、またグループの「メンバーとは初対面」であるにもかかわらず、お互いに「相手を見る、話す、感じる、伝える」そして「自己表現」することによって、「よい印象、イメージ」がふくらんでいったことなどの解釈ができる。また他の二つの塊については「グループの持つ雰囲気が、自分自身の話もできるし、話を聞くことで理解」が深まったこと、そして「自分とは違う人がいる（自分と人と

は違う）」ことの再確認になったと解釈できそうである。

「自分」「グループ」それぞれについて、いくつかの具体例を示す。まず「自分」に関しての記述から。「自分の自己紹介をする時は、やはり好きなことを中心にアピールしていることがわかりました。」「伝えた内容をそのまま受け取ってもらえたと思うので、自分で思っているよりも自己開示がはかれていることに気づいた。」「他者から見た自分のことがわかりました。」「相手のイメージをそのまま受け取ることが多いと感じました。自分の言ったこと以外のイメージが出てきて、意外でしたが嬉しかったです。」「作成しながら自己洞察したり、考えたり、感じたり、イメージしたりと客観的に自分自身と向き合う時間が持てたような気がしました。メンバーの作品を見て、その方々のことをもっと話をしたり、知りたくなりました。想像力が豊かに働く感じがしました。」「自分自身が用意していた切り抜きは自分が認めている部分が表れている（表現しようとしている）。メンバーからもらったものは、実は深層心理部分が出ました。本当はこうしたいのになあ…」と思ったことを、ずばりと見抜かれたような気がします。」「私はこのような方法は初めてしましたので、とまどいと楽しみがありました。皆さんから聴くこと、自分の言いたいこと、グループのまとまりがよく、理解が十分にできて、私なりの理解がよくできました。」など、このワークが自己理解につながったなど、プラスの感情を伴うと思われる記述が大部分を占めていた。一方で、「時間が少なすぎて満足につくれなかったです。みなと笑いのつぼが違うようです。私は常に「笑かしてやろう」と思っていることに気づいた。私の表現は直接的すぎて、作

品から想像をふくらますことができない。」「初めて会う人と話するのは難しい。話さなければという使命感でしゃべっている気がいつもしています。あまりこういう形式は好きではありません。ちょっとしんどいです、気分的に。」など少数派だが、マイナス感情を伴う記述も見られた。

一方「グループ」に関しては、「とても気さくな方たちで、楽しく話ことができました。自分とはまた違う人の事を考えて切り抜くのは、自分と他人の違いというのを改めて感じ、選ぶ作業はとても楽しかったです。」「メンバーそれぞれが他者に興味を持ち、意見交換がよく行えた。また発表に対する印象（渡した材料）についても、意見を述べ、自分自身を再発見できたメンバーもいた。」「リーダーシップをとる人、遠慮する人、どうしようかと悩んでいる人がいる。話を聴こうとする姿勢、相手を理解しようとする姿勢が感じられた。」

「グループによるものか、話していても安心感が持て、初対面ながら親近感を持て、また各自、自由な雰囲気で、信頼感を持て、そしてグループ5人が十分に参加でき、私自身も楽しく参加しました。」「メンバーの話を充分に聴くことで、見えてくる部分、イメージできることがわかりました。」「明るい雰囲気で「何でもO.K.」のオーラが出ていたので、安心して自己開示することができたと思う。肯定的な雰囲気を出すことが、相手の心を開かせることにつながることを体感した。」など、グループの持つ雰囲気が、自己理解や自己開示の際にプラスに働いたと感じる人が大多数であった。一方で、少数派ではあるが、「皆まじめすぎてぶっ飛んだ絵がなかった。抽象的な物が多かった。なんのこっちゃわからん。」というような意見もあった。

「自分」「グループ」いずれの場合も、20代の受講生と、それ以外の世代との間で、微妙なずれを感じていると思わせるものが多かった。

4. 考 察

本研究の目的は、コラージュを用いたワークが、体験学習の流れの中で、自己理解や他者理解、相互理解のみならず、グループ間のコミュニケーションを活性化させるものとしても有効であるか否かを検討することにあった。それを実証する具体例として、通信教育スクーリングの講義をとりあげた。

今回の事例では、前述のように、ふりかえり用紙①②の質問のいずれの結果から、受講者の大半がこのワークに参加して「楽しく」「満足」だったこと。またグループのメンバーは、大半が初対面であったにもかかわらず、グループは「安心」と「信頼」ができるもので、「自由な雰囲気」であり、自分自身もメンバーも、このグループに「十分参加していた」と答えていることがわかる。

筆者はこれまで、様々な場面で、類似の実践を行ってきた。しかしこの類の講義（体験学習を含むもの）では、たいていの場合、評価が2分されることが多い。その意味では、今回のようにほぼ全員からプラス評価を得られたのは、実はまれなことでもあった。また今回のメンバーの中には、年齢では最高齢79歳の男性、聴覚障害者も含まれていた。メンバー構成から考えると、通常よりばらつきがあると言えるものだったのである。それにもかかわらず、このような結果が得られたのは、いくつかの要因があったように思う。そこでその点から考察してみたい。

まず今回取り上げた事例は、通信教育のスクーリングの講義であった。そのため通常90分の通学の講義と異なり、3コマ続きで、半日をまとめた時間として自由に使えるという便利さがあった。同様の内容を、通常の通学の講義で実施する場合、講義時間の制約から、どうしても2日間に分けて実施することになる。その場合、前半で作られたグループの雰囲気や、次回まで維持することが非常に難しい場合が多い。そのため2日目は、また最初からのスタートになってしまう。それに対して今回の場合、まとめた時間の確保が可能になった。そのため、課題が進むにつれて徐々に築き上げられてきた良い雰囲気を、そのまま維持できる環境にあった。

また通信教育の学生は、通常はテキスト履修が主で、独学で学んでいる時間が多い。そのためスクーリングは、対面コミュニケーションが可能となる貴重な機会でもある。その意味で、彼（彼女）らが、その内容のいかににかかわらず、スクーリングそのものを、大変楽しみにしていた可能性は大きい。

さらに彼（彼女）らは、通常は日常生活の大半を学生以外の状態で過している。今回の受講生は、偶然にも受講生の約半数が、看護や保育関係の現職者であった。彼（彼女）らは、通常の職場においても、人間関係に関する問題意識を持ちやすい立場にある。職業柄、コミュニケーションは、一方通行では成り立たないことを、自らの職場でも、いやというほど感じている場合も多いであろう。コミュニケーションの問題は、良いも悪いも、まず自分自身が問題意識を持つところから始まると考えれば、今回のワークで、彼（彼女）らの職業の持つ特性が、プラスの影響を与えた可能性は大きい。このことは、例えば課題Ⅱ

で、グループの他のメンバーに切抜きを渡すとき、「相手を思いやる気持ちがある」「他者のことを真剣に考えながら選んでいた」などのコメント例からも推測できる。

ところで、今回のワークでは、課題Ⅰで作成したコラージュを用いて、グループの他のメンバーに自己紹介をするという場面を設けた。その際、メンバーに紹介する自分は、「（思い込みかもしれない）本当の自分」でも、「見せたい自分」でも構わないということを事前に伝えていた。そのため、受講生の中には、冗談や嘘（見破られるかどうかも含めて）を含めて、ユーモアたっぷりに自己紹介するものもいた。そういった、時にはユーモアあふれる「遊び」の要素は、自然と「笑い」のある空間を作り出していき、グループ間の雰囲気を和やかにするきっかけづくりともなった。

またコラージュという媒介物があることで、言語のみのコミュニケーションでは伝えられないもの、たとえば視覚的な要素や、多義的な解釈も可能になったようだった。メンバー理解のために、それぞれが作成したコラージュ作品と、それを用いて自己紹介という2つの手掛かりがあったことは、グループメンバーのイメージを、双方で自由に広げるものとなり、自然に会話もはずんでいったようだ。

さらに、「コミュニケーションのワークなのに、なぜコラージュなのか」という小さな「驚き」に始まり、大半のものにとっては、久々に行うハサミやのりを使つての作業。これも本来図画工作は苦手だと思ひ込んでいる人や、絵心はないと思ひ込んでいる人にとっても、「楽しい」時間となったようである。「童心にかえったようで楽しかった」という感想も多くみられた。ここでも、コラージュの果たした役割は大きかったのではないかな。

繰り返しになるが、今回の事例がうまく進んだ最大の理由は、その背景に、今回の受講生が、グループのメンバー全員を、お互いに「肯定的な側面」からとらえようとする基本的な姿勢を持っていたことがあげられる。何よりも、その基本姿勢があつてこそ、その後の展開は可能となった。その際、自己表現作品としてのコラージュは、ちょうどクッションのように「遊び」の空間を作り出した。結果として、コミュニケーションをより活性化させるものとしても重要な役割を果たした。

最後になったが、今回のメンバーの中には、最高齢79歳の男性や聴覚障害者も含まれていた。彼らとの出会いは筆者に様々なことを教えてくれたように思う。

生涯学習の時代に突入し、少し前に比べると、さまざまな立場の人が、その気になれば学習する機会を持ちやすい時代になった。当然のことながら、今後、さまざまな年齢層や環境にある人々が、同じ場で、ともに学習する機会も増えてくるであろう。その時、授業提供者にできることは何なのか。

今回の事例では、この年齢差や生活している背景文脈の違いは、むしろプラスに働いたようであった。79歳の男性は自らの感想の中で、「とまどい」と「楽しみ」をもって参加したと振り返っている。通常なら、接点を持つにくい関係にある年齢層が、このような機会に互いを知ることは、お互いのためにも、大変貴重な機会であると感じた。

また、コミュニケーションチャンネルには様々なものがあり、言語のみではないと常々語っている筆者であつたが、受講生の中に聴覚障害を持つものが含まれており、会話は手話になるということを最初に知った時、果たしてコミュニケーションワーク中心のこの講義で、

うまく進めていけるだろうかという大きな不安があつた。しかしこの不安は、講義が進むにつれて、しだいに消え失せて行つた。もちろんその背景に、本学の手話ボランティアの学生の多大な力添えがあつたことも否めない。しかし、彼の豊かな表情、身振り手振りを含んだコミュニケーション方法は、他のグループメンバーにもプラスの影響を与えていたようだった。理解できないかもしれないが、相手の話を理解したい、聴こう、伝えようとする姿勢は、その後の展開をプラスに導く力を持っていると改めて感じた次第である。双方がともに相手を理解したいと思う時、人は複数の手段を使って、場合によっては、通常の生活よりも盛んに、互いの交流をはかろうと努力するのかもしれない。

今回の事例は、コミュニケーションワークを促進させるものとして、コラージュが有効に働く可能性を示唆した。今後も、受講生の感想などを参考にしながら、改善を重ねていきたいと思う。

参考・引用文献

- 森谷寛之 1995 子どものアートセラピー
ー箱庭・描画・コラージュー 金剛出版
- 森谷寛之・杉浦京子編 1999 コラージュ療法、現代のエスプリ、No.386.
- 森谷寛之・杉浦京子・入江茂・山中康裕 1993
コラージュ療法入門 創元社
- 佐藤仁美 2003 看護教育におけるコラージュ
活用の試みー自己理解・他者理解・相互理解
心理臨床学研究、21、167-178.
- 白石裕子・則包和也 2001 精神臨床看護
学演習におけるコラージュ療法の活用ー学
生の自己理解・他者理解の促進を目指して
香川県立医療短期大学紀要、3、141-147.

- 杉浦京子 1994 コラージュ療法 川島書店
竹内敏晴 1990 「からだ」と「ことば」の
レッスン 講談社現代新書
竹内敏晴 1999 教師のためのからだとこと
ば考 筑摩文芸文庫
田中千穂子 2002 心理臨床への手びき 初
心者の問いに答える 東京大学出版会
吉田ゆり 2001 人間関係体験学習における
コラージュの導入ーコラージュ作品に見る
女子短大生の自己表現ー鹿児島純心女子短
期大学紀要、31、167-89.

謝 辞

本講座の手話ボランティアとして協力して
くださった学生のみなさん、また本論文のデー
タ提供に協力してくださった受講生のみなさ
んに、心より感謝申し上げます。